

療育理論編

～ 「ABA・TEACCH・CBT etc.」 ～



R7.12.16

障がい児成長支援協会セミナー

右のQRコードから
左のページの表示を
お願いします。



合同会社サンクスシェア
代表社員・相談支援専門員 田中 さとる



EBM（根拠に基づく実践）の定義

療育は経験則や「なんとなく」ではなく、以下の3つの統合によって決定される

- 最良の研究的証拠（科学的エビデンス）
- 専門家の経験・スキル（臨床知見）
- 本人・家族の価値観・意向

データに基づいた実践（PDCA）

介入は「やりっぱなし」にせず、測定可能な目標を設定し、データを記録して効果を検証

記録（ABC記録など）

分析

改善

効果指標の設定

「落ち着いて過ごす」等の曖昧な目標ではなく、具体的な数値目標を設定

頻度

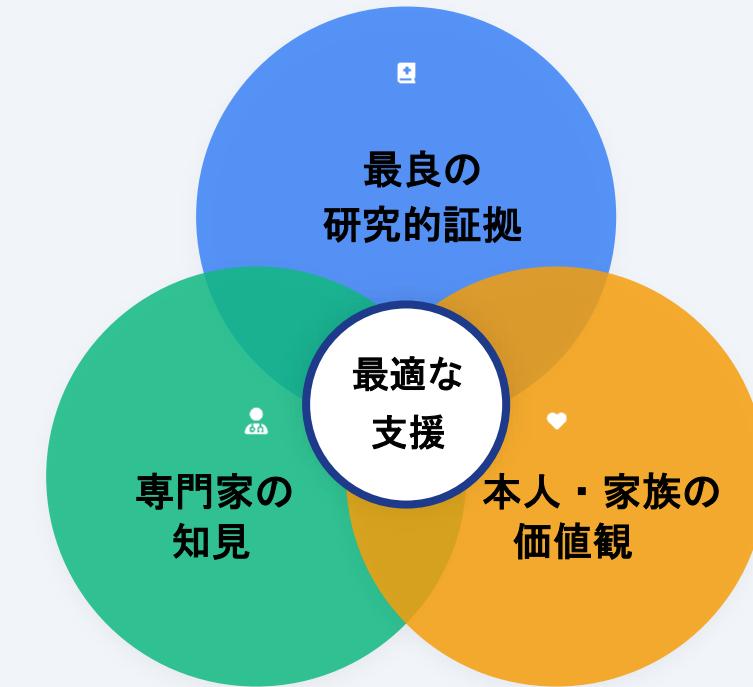
持続時間

正答率

般化

エビデンスに基づく療育の重要性

EBMの3要素



エビデンスだけでも不十分。
子どもの特性や家族の希望と
照らし合わせ、現場で「再評
価」し続ける姿勢が重要

なぜ療育理論を学ぶのか

● 支援の質の向上



支援の根拠を明確にする

療育理論に基づく支援は、なぜそのような支援を行うのかを明確にし、より納得して受け入れてもらうおとができる



支援の引き出しを増やす

様々な療育理論を学ぶことで、子どもひとりひとりの特性に合わせた適切な支援方法が増え、対応が柔軟になる



チームとしての支援質向上

支援員間で共通の理論的枠組みを持つことで、チームとしての支援の質が向上し、連携がスムーズになる



子どもへのより良い支援

支援員の専門性が高まり、子どもたちへのより適切な支援へと繋がる

【今日の内容】

- ◆ 行動へのアプローチ
- ◆ 認知・行動へのアプローチ
- ◆ 感覚・身体へのアプローチ

行動へのアプローチ



ABA ペアレントトレーニング など

行動へのアプローチ 概要

子どもの「行動」に焦点を当て、その行動が起こる背景や機能を分析することで、適切な行動を増やし、困った行動を減らすためのアプローチ

行動の分析

行動の背景や機能を
Understandingするために、ABC分析を行う

↑ 適切な行動の増加

良い結果が起きるとそ
の行動が起きやすくな
る「強化」の原理を活
用

↓ 困った行動の減少

問題行動が起こる原因
を特定し、適切な代替
行動を促す

💡 **重要:** 行動そのものだけでなく、その行動が何によって強化されているのかを
特定すること



ABA（応用行動分析）

行動と環境の相互作用を科学的に分析し、
望ましい行動を増やし、困った行動を減らすアプローチ



エビデンスに基づく



行動の原理



データ重視



早期介入に効果

行動を理解するためには、行動そのものだけでなく、
「直前の状況（A）」と「直後の結果（C）」という3つの枠組み（ABC）で分析



A 先行事象

行動が起こる直前の環境や状況「いつ」「どこで」「誰と」「何をしていたか」などのきっかけ

例：おもちゃ売り場の前を通る

B 行動

本人が行う具体的な動作や発言「死人テスト」（死人にできないこと=行動）で判断する

例：泣き叫んで床に転がる

C 結果

行動の直後に起きた変化。良いことが起きれば行動は増え、悪いことが起きれば減る

例：おもちゃを買ってもらえる

強化・弱化・消去の原理

行動の原理マトリックス

出現（与える）

消失（取り去る）

行動が
増える
(強化)

 **正の強化**
ご褒美をもらう
褒められる

行動が
減る
(弱化)

 **正の弱化**
叱られる
罰を受ける

 **負の強化**
嫌なことが
なくなる

 **負の弱化**
ゲーム没収
楽しみが減る

 **消去
(Extinction)**

強化されていた結果を与えない（無視など） → 行動が減る



強化 (Reinforcement)

行動を増やす

支援の基本 望ましい行動の直後に「良いこと（好子）」を提供することで、その行動を定着させる

※支援現場では「正の強化」を積極的に活用する



消去 (Extinction)

行動を減らす

これまで得られていた注目や要求などの「結果」を与えないことで、行動を減少させる

⚠ 注意：一時的に行動が悪化する「消去バースト」が起こる



弱化 (Punishment)

行動を減らす

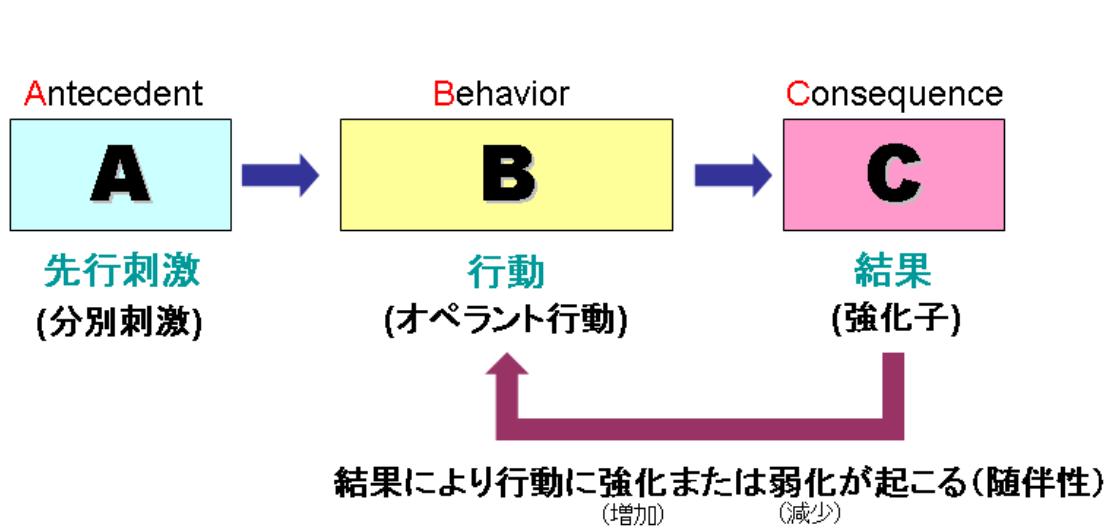
いわゆる「罰」 即効性はあるが、副作用（恐怖感、隠れて行動するなど）があるため、原則として使用は避ける

不適切行動を減らす

【不適切行動を減少させる方法】

不適切な行動の頻度を下げる (=強化しない)

三項随伴性(ABC分析)



【不適切行動が強化されている状態を断ち切る】

方法① 嫌悪刺激の呈示

方法② 消去手続き

方法③ 刺激の撤去

方法④ 分化強化手続き

不適切行動を減らす

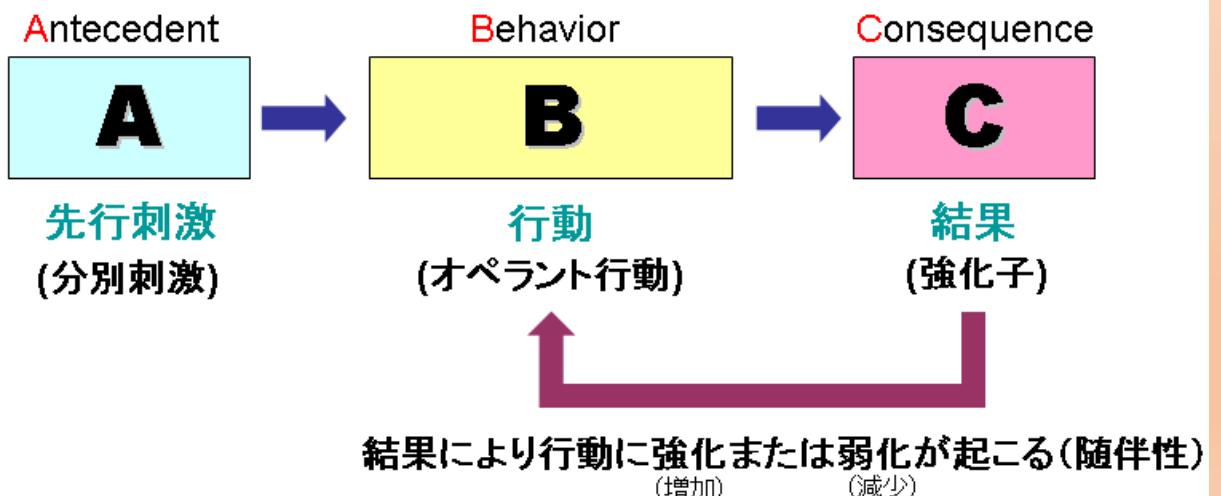
【問題行動を減少させる方法】

方法① 嫌悪刺激の呈示

無条件性嫌悪刺激：肉体的な苦痛や不安感を与えるもの

条件性嫌悪刺激：経験を通して嫌悪感を与えるようになったもの

三項随伴性(ABC分析)



※ 他の方法がうまくいかないときの最後の手段
直接「虐待」につながりかねない

対人職を専門とする支援者として使用したくない方法

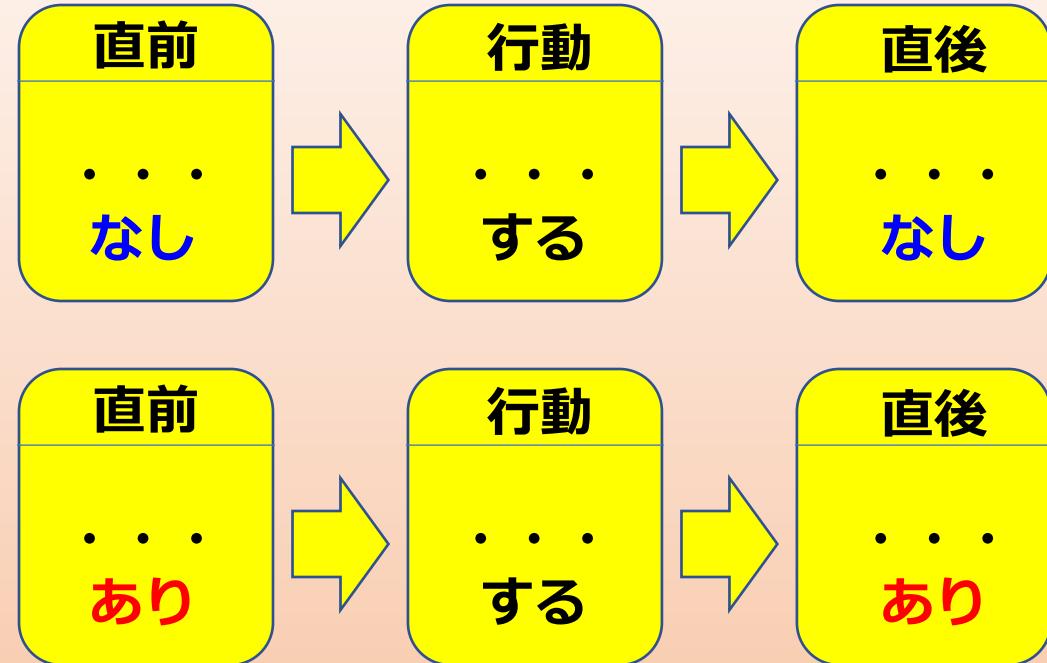
不適切行動を減らす

【問題行動を減少させる方法】

方法② 消去手続き

【消去】

これまで**強化されていた行動**に対して
強化の隨伴性を中止すると
強化の隨伴性を導入する以前の状態まで
その行動は減少する



※ 「計画的無視」

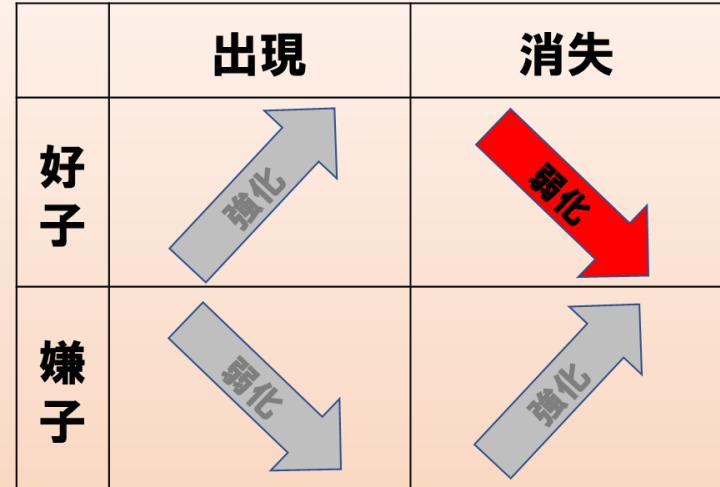
強化も弱化もしない

= なにもしない

不適切行動を減らす

【問題行動を減少させる方法】

方法③ 刺激の除去



好子・強化子を取り去ることで強化を断ち切る

タイムアウト：強化されている機会を一定期間与えなくすること

- ・非隔離タイムアウト その場所で行う
- ・排除タイムアウト その活動や環境から切り離す
- ・隔離タイムアウト 別室に移動させて行う

- ・短く
- ・終われば元に

本人、保護者、関係者などの承諾を得ること

不適切行動を減らす

【問題行動を減少させる方法】

方法④ 分化強化手続き

- ア 低頻度分化強化 イ 他行動分化強化
- ウ 対立行動分化強化 エ 代替行動分化強化

【分化強化とは・・・】

望ましい行動を増やし（強化し）、望ましくない行動を減らす（消去する）ために、強化と消去の原理を応用する手法

ア 低頻度分化強化 : 不適切行動の回数や時間が基準以下の場合に強化する

問題行動があらかじめ決めた回数や時間の基準値以下で起こった場合に強化することで発生頻度を減少させる。

【例】帰りの会で、他者が話をしているのに自分勝手にしゃべり始める回数が2回以下だった時、会が終わってからごほうびとしてトークンカードに頑張ったシールを渡す。

不適切行動を減らす

【問題行動を減少させる方法】

方法④ 分化強化手続き

- ア 低頻度分化強化 イ 他行動分化強化
- ウ 対立行動分化強化 エ 代替行動分化強化

【分化強化とは・・・】

望ましい行動を増やし（強化し）、望ましくない行動を減らす（消去する）ために、強化と消去の原理を応用する手法

イ 他行動分化強化：不適切行動が起きていない場合を強化する

不適切行動が起きていない時間帯やその瞬間があるときに強化をすることで、不適切行動が起きない時間や場面を増やしていくアプローチ。

【例】これから10分間、途中で休まず集中して宿題に取り組むことができた時、宿題全部が終わった後に、好きな職員と好きな遊びを10分間することができる。

不適切行動を減らす

【問題行動を減少させる方法】

方法④ 分化強化手続き

- ア 低頻度分化強化 イ 他行動分化強化
- ウ 対立行動分化強化 エ 代替行動分化強化

【分化強化とは・・・】

望ましい行動を増やし（強化し）、望ましくない行動を減らす（消去する）ために、強化と消去の原理を応用する手法

ウ 対立行動分化強化：同時に実行できない代わりの行動を強化

不適切行動と同時に成立しない行動をターゲットにし、その行動がみられたときに強化をする。一方、不適切行動が発生しているときは強化しない。

【例】（離席と着席）頻繁に離席がみられる子どもが、着席をして創作活動に取り組んでいる姿をほめて強化し、離席している場合には強化しない（声掛けをしたり注目したりなどの反応をしない）。

不適切行動を減らす

【問題行動を減少させる方法】

方法④ 分化強化手続き

- ア 低頻度分化強化 イ 他行動分化強化
- ウ 対立行動分化強化 エ 代替行動分化強化

【分化強化とは・・・】

望ましい行動を増やし（強化し）、望ましくない行動を減らす（消去する）ために、強化と消去の原理を応用する手法

エ 代替行動分化強化：不適切行動に置き換わる代わりの行動を強化

不適切行動に代わる代替行動を強化することで、不適切行動に費やされていた時間の割合よりも代替行動に費やされる時間の割合を高めるというアプローチ。

【例】人の物を無断で借りることがよくある子どもが、「貸して」と頼んで他児から了承を得て物を使うことができた場合のみ強化する。



ペアレントトレーニング

保護者を対象とした、子どもの行動への適切な対応スキルを習得し、子どもの行動変容を促すプログラム



子どもの行動理解



環境調整



ほめる



指示する

ペアレントトレーニング

家庭と事業所が連携し、子どもの好ましい行動を育む一貫した環境を作る



目標の共有と一貫性 連携

方針を統一し、予測可能な環境を作る



ABCフレームの共有 基礎

行動の理由を行動分析視点で共通理解する



肯定的な注目（ほめる） 技法

当たり前の行動を具体的に即時にはめる



環境調整（先行操作） 技法

叱らず済む環境やスケジュールを整える



明確な指示の出し方 技法

「近くで穏やかに短く肯定形」で伝える



トークン活用 技法

シール表などで達成感を可視化し強化する



エスカレーション対策 実践

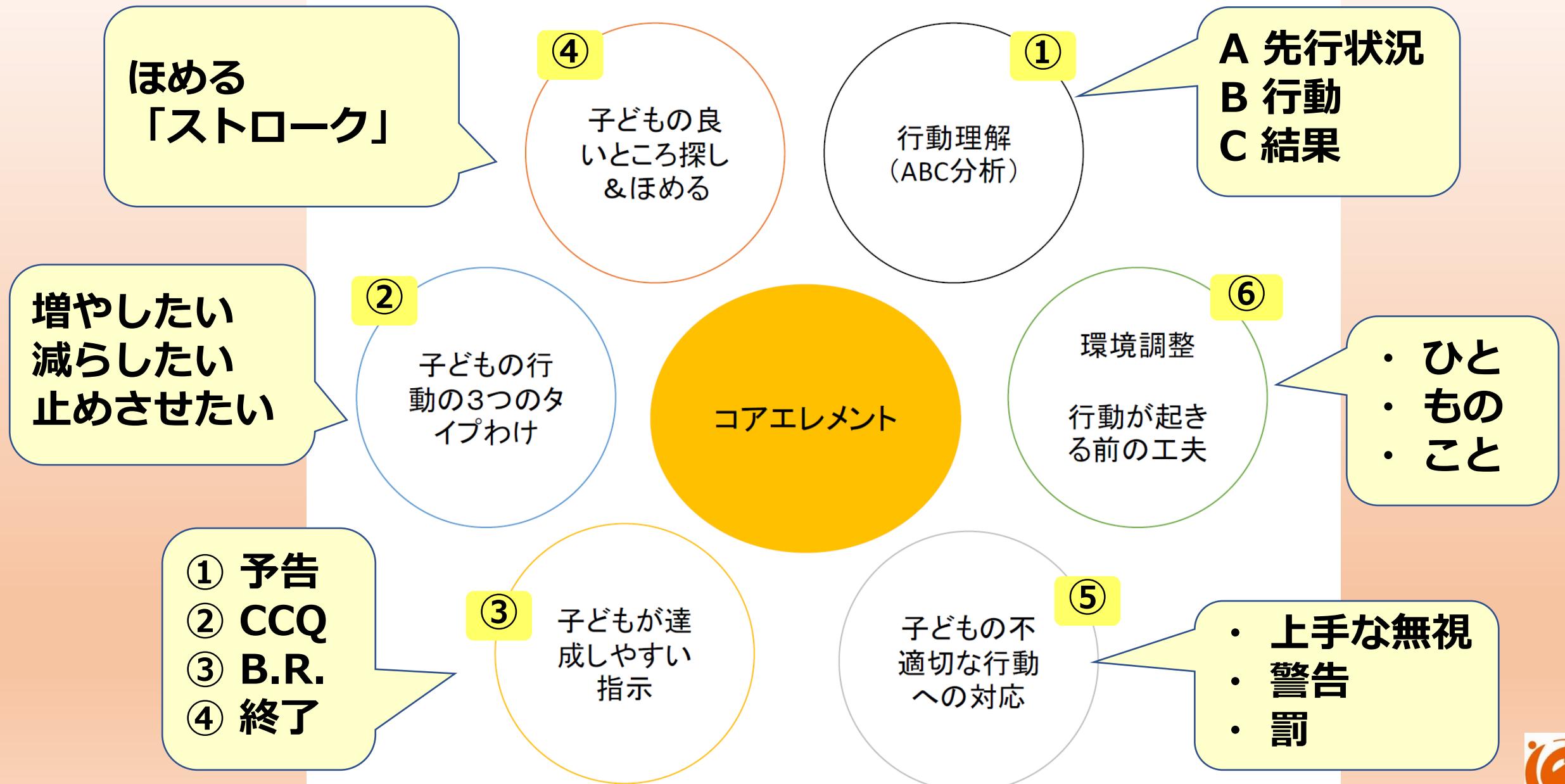
安全確保と計画的な無視の方法を確認する



家庭での実践と伴走 実践

少しづつ実践し、支援者が認め励ます

【ペアレントトレーニングのポイント】



【ペアレントトレーニングの内容】

セッション1	オリエンテーション（目的・進め方・紹介など） 子どもの行動観察と3つの行動の分類
セッション2	肯定的な注目を与える（ほめ方のコツ）
セッション3	好ましくない行動を減らす① ～上手な無視の仕方～
セッション4	好ましくない行動を減らす② ～無視とほめるの組み合わせ～
セッション5	子どもの協力を増やす方法① ～効果的な指示の出し方①～
セッション6	子どもの協力を増やす方法② ～効果的な指示の出し方②～
セッション7	子どもの協力を増やす方法③ ～よりよい行動のためのチャート（BBC）～
セッション8	制限を設ける ～警告とペナルティの与え方～
セッション9	学校・園との連携
セッション10	これまでのふりかえり

時間：60～90分

人数：3～6人

期間：1回／2週

形態：講義 GW 臨床

ペアレントトレーニング
ガイドブックより

認知・心理へのアプローチ



CBT SST など

認知・心理へのアプローチ 概要



子どもの内面、すなわち「考え方（認知）」や「感情」に働きかけることで、ストレスへの対処や自己表現を促す療育アプローチ



認知行動療法(CBT)

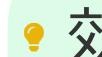
物事の捉え方（認知）が感情や行動に影響を与えるという考えに基づき、気持ちや行動のコントロールを学ぶことを目指す

- 効果的実践例: スモールステップ（暴露療法）、感情の認識と表現



ソーシャルスキルトレーニング(SST)

社会生活に欠かせない対人関係のスキルを、具体的な練習 through して獲得するためのトレーニング



- 効果的実践例: 挨拶の練習、断り方の練習、感情のコントロール



箱庭療法

言葉での自己表現が苦手な子どもに適した心理療法。砂の入った箱にミニチュアを置いて自分の箱庭を作り、自己表現をする



- 効果的実践例: 感情をカードで表現するゲーム



認知行動療法 (CBT)

ストレス時の「考え（認知）」と、引き起こされる「行動」にアプローチし、よりよい考え方や行動を身につける心理療法



認知 気分 行動 身体



気分の数値化



強み



再認知構成

認知行動療法 (CBT)

“物事の捉え方（認知）が感情や行動に影響を与えるという考えに基づき、気持ちや行動的コントロールを学ぶ心理療法

認知

感情

行動

スモールステップ（暴露療法）

不安や苦手なことに対して、段階的に小さなステップで少しずつ挑戦していく方法。例えば、特定の音を苦手とする子どもに対して、極小音でその音を聞かせ、徐々に音を大きくしていくことで慣れさせる。

感情の認識と表現

自分の感情に気づき、それを適切に表現する方法を学ぶ活動。絵カードや表情の練習などを通して、感情を言葉や行動で伝えるスキルを養う。

再認知構成法とは

【気分と認知の評価】

- ・ 気分の同定と数値化
- ・ 自動思考への気づき
- ・ 10の「推論の誤り」



4つの側面
に注目！

全か無か思考 過度の一般化 心のフィルター マイナス思考

結論の飛躍 拡大解釈と過小評価 感情的決めつけ

すべき思考 レッテル貼り 個人化 (事実の消去・歪曲・一般化)



ソーシャルスキルトレーニング (SST)

人の上手な接し方や自分の気持ちの伝え方など、社会生活で必要なスキルを練習する訓練



認知 気分 行動 身体



気分の数値化



強み



再認知構成

S S T (ソーシャルスキルトレーニング)

社会生活を送る上で必要な対人スキルや自己管理スキルを、
学習理論に基づいて体系的に学ぶトレーニング



ねらい・目的

- ✓ 対人行動の習得挨拶、会話のルール、マナー
- ✓ 自己理解・自己調整、自分の感情に気づく、怒りのコントロール
- ✓ 他者理解相手の気持ちや立場を考える



実践のステップ

- ① 教示（インストラクション）
- ② モデリング（手本を見る）
- ③ リハーサル（ロールプレイ）
- ④ フィードバック&般化



放ディでの実践例

- ★ 活動の切り替え「貸して」「いいよ」「あとでね」のやり取り練習
- ★ ゲーム活動順番待ち、勝ち負けの受け入れ
- ★ 困ったときの表現「手伝ってください」と援助要請を出す練習

① モデリング

② 強化

③ 行動形成

④ 反復学習

⑤ 般化

① モデリング

他者を観察し模倣するだけで行動を学習する（外的強化がなくても）

【3つの効果】

1 観察学習による行動獲得

- ・モデルの行動を見て新しい行動を学習する

2 制止・脱制止

- ・すでに学習していた行動を行わなくなる
- ・しないようにしていた行動を行うようになる

3 反応促進

- ・学習していた行動がより頻繁に行われるようになる



① モデリング

② 強化

③ 行動形成

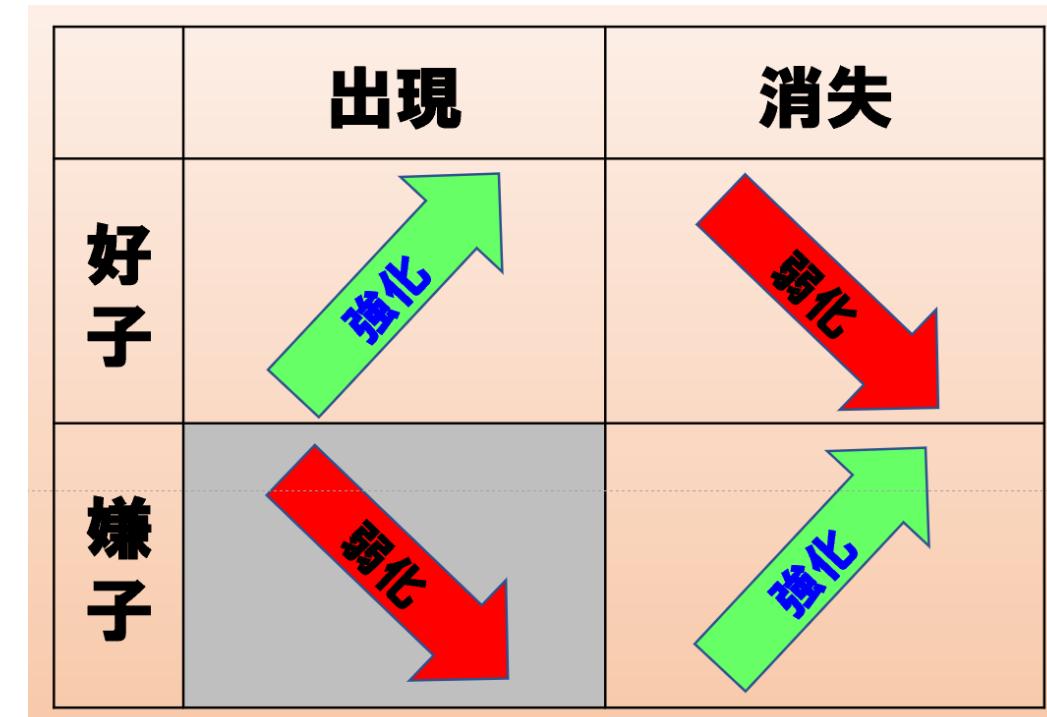
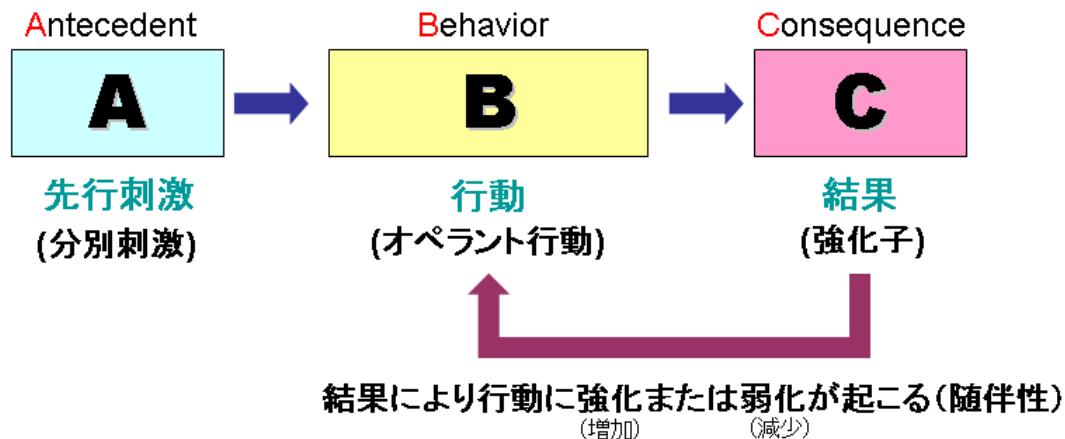
④ 反復学習

⑤ 般化

② 強化

その行動をまた実行する可能性を高めるため、
行動に対して、好ましい結果を与えること（強化子・好子）

三項随伴性(ABC分析)



① モデリング

② 強化

③ 行動形成

④ 反復学習

⑤ 般化

③ 行動形成 シェーピング

- ・望まれる目標に向けて連続的にステップを踏んで強化を行うこと
- ・目標行動により似ている行動を次々と強化していく手続き



A : ひとつのスキルは、どのようなスキルから成り立っているのか？

B : ひとつのスキルは、どのようなスキルが身についてできるようになるのか？

① モデリング

② 強化

③ 行動形成

④ 反復学習

⑤ 般化

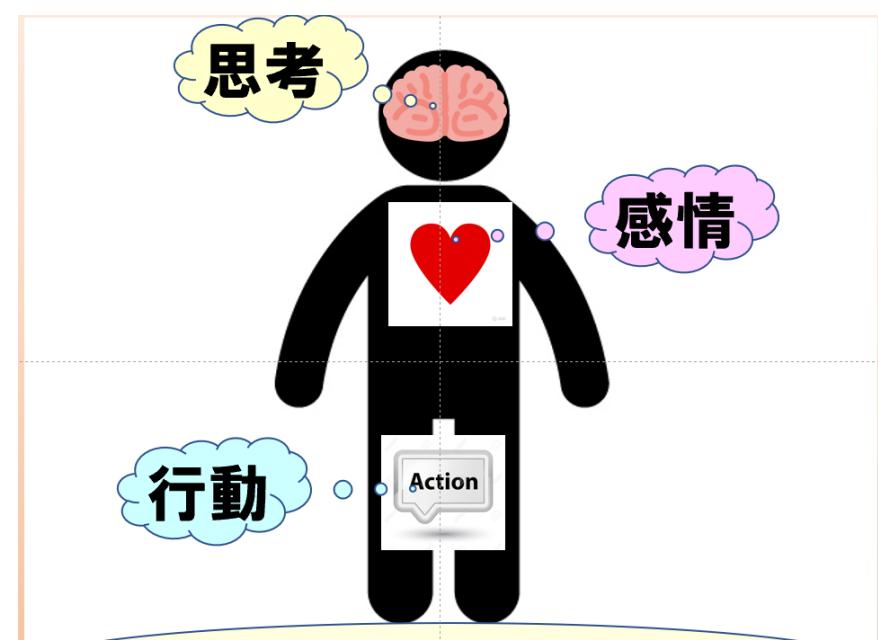
④ 反復学習

あるスキルを自動的にできるまで繰り返して練習すること
(繰り返し練習する・意識してやることを繰りかえそう)

ロールプレイの繰り返し **(体験する)**
(実際の場面や状況を想定して、
役割を演じることで実践的なスキルを
学ぶ手法)

手順

- ・個人ごとの役割を決める
- ・目的や場面を設定する
- ・フィードバックをする



① モデリング

② 強化

③ 行動形成

④ 反復学習

⑤ 般化

⑤ 般化

ある場面で獲得されたスキルをそれ以外の場面でも使えるようになること
(実際の場面でできる・応用する)

習慣とは

十分に学習した行動や自動化された行動系列のうち、比較的特定の状況で生じ、時間がたつことで運動性の反射となり、動機付けや認知の影響を受けなくなり、意識的な意図をほとんど、あるいはまったく伴わずに実行されるもの。

習慣化の特徴

- ・その行動をするのが当たり前に感じる。
その行動をしない方が気持ち悪いと、違和感を覚えることもある。
- ・意志の力が必要ない。無意識のうちにに行っていることもある。
- ・がんばらずにずっと継続できる。
むしろやめようと思っても、やめられない。

感覚・身体へのアプローチ



感覚統合療法 など

感覚・身体へのアプローチ 概要

感覚の過敏さや身体機能に焦点を当て、子どもたちが自身の身体をより良く認識し、環境に適応するための基盤を築くことを目指す



感覚統合療法

感覚情報の整理と統合
感覚過敏や鈍麻の改善
を目的とする



運動療育

身体活動を通じて基礎
体力や運動能力の向上
自己肯定感の高まりを
促す



身体的支援

身体の動かし方や姿勢
の維持、環境との適応
をサポートする

重要なポイント

- 感覚統合療法は、脳が感覚情報を効率的に処理できるよう支援
- 運動療育は、ボディイメージや自己コントロール能力の向上に寄与
- 子どもが遊びの中で自然に感覚ニーズを満たすのを促す



感覺統合療法

脳の感覺情報をうまく整理・統合する力を育てる専門的な支援（療育）



固有受容覚



前提覚



遊び



感覺の統合

感覚統合療法とは



感覚統合の概念

私たちの脳が目、耳、皮膚、筋肉、関節などから入ってくる様々な感覚情報（触覚、固有覚、前庭覚など）を整理し、統合するプロセスに着目したアプローチ

- 💡 感覚統合がうまくいくと、子どもは環境に適応して適切に行動できるようになる



視覚



聴覚



触覚



運動

①感覚過敏

特定の音や感触を極端に嫌がる、特定の素材の服を着たがらないなど

②感覚鈍麻

強い刺激を求める、痛みを感じにくい、動き回りたいと求めるなど

◎感覚統合療法の目的

子どもが自ら感覚刺激を調整し、脳の発達を促すことを目指す

感覚統合療法とは

対象となる状態

感覚過敏 感覚鈍麻 感覚探求 不器用さ

特定の音・触感への強い拒否感や、逆に強い刺激を求める（回転、衝突など）、姿勢が保てない等の状態

実施と専門性

主に作業療法士（OT）が、脳機能の視点からアセスメントを行い、遊びを通じた個別介入を実施する。※感覚統合療法はエビデンスに基づき、特定ニーズに有効

目的：適応反応を引き出す

無意識に入ってくる多様な感覚を脳で整理・統合し、その場に応じた適切な行動（適応反応）ができるようにする

放ディでの位置付け

専門的な治療的介入だけでなく、「環境調整」（イヤーマフ等）や日常活動への「汎化」が重要



⚠ 注意：自己流の強い感覚刺激（回転など）は危険な場合もある 専門家の助言やアセスメントに基づくことが原則

感覚統合の実践（放ディ）

放ディができる感覚遊びの例



揺れ・バランス（前庭覚）

ブランコ、バランスボール、トランポリン



力を使う動き（固有受容覚）

マット運動、壁押し、重い荷物運び



触覚・環境調整

スライム、粘土、ボールプール、イヤーマフ



遊びを通じたアプローチ

「訓練」ではなく「遊び」として設定本人が自発的に取り組み、「楽しい」「できた」と感じる活動を選ぶ。



環境調整とスマールステップ

照明の明るさ、音、匂いなどの刺激量を調整します。苦手な刺激は軽減し、決して無理強いはせず、少しづつ慣れる機会を作る。



自己調整とリスク管理

興奮時のクールダウン方法を見つける。器具使用時はスタッフが付き添い、安全基準を遵守。

楽しい!
が基本

無理強い
しない

安全
第一





TEACCH（構造化支援）

「自閉症の文化」を理解し、環境を構造化することで
見通しを高め、自立を促進する生涯支援プログラム



物理的構造化



視覚的支援



強みを活かす



生涯支援

TEACCH理論とは？

- ・ TEACCHとは、「Treatment and Education of Autistic and related Communication-handicapped CHildren」の略で、「自閉症及び、それに準ずるコミュニケーション課題を抱える子ども向けのケアと教育」
- ・ - 1970年代にノースカロライナ大学で開発
- ・ - 自閉症スペクトラム（ASD）の支援プログラム
- ・ - 個々の特性を尊重し、構造化された環境を提供

ASDの特性（視覚優位・予測困難など）に合わせた、環境を整理して意味を伝える「構造化」



物理的構造化

空間を目的に合わせて明確に区切り、視覚的・物理的に整理すること。「どこで」「何を」する場所かが一目で分かるようにする。

具体例

パーティションで仕切る、学習エリアと遊びエリアをカーペットの色で分ける、刺激を遮断する。



スケジュール

時間の流れを視覚的に提示すること。「いつ」「何を」「どの順番で」行うかを伝え、見通しを持たせて不安を軽減します。

具体例

絵カードや写真を使った日課表、終わったらカードを外す（トランジション）、残り時間をタイマーで示す。



ワークシステム

自立的な活動を支える仕組み。「①何を、②どれくらい、③いつ終わり、④次は何か」の4点を視覚的に伝えます。

具体例

左（未）から右（済）への課題移動ボックス、課題リスト、終わった後のご褒美提示。



視覚的構造化

課題の手順ややり方を、材料自体や視覚的な手がかりで示すこと。言葉による指示がなくても理解できるように工夫します。

具体例

完成見本の提示、材料を置く位置のガイド、手順書（写真付き）、ジグ（枠組み）。



絵カード交換式コミュニケーションシステム

PECS (Picture Exchange Communication System)

コミュニケーションに困難を抱える人が、絵カードを使って自発的に意思を伝えるための方法



絵カード



視覚的支援



表出



6つのフェーズ

PECSの基本メカニズム



6つのフェーズ（学習ステップ）

- ① 交換：欲しいものの絵カードを渡す
- ② 距離と持続性：相手を探して渡しに行く
- ③ 識別：複数の絵から欲しいものを選ぶ
- ④ 文構成：「～ください」等の文を作る
- ⑤ 応答的 requirement：質問に対するカードを選ぶ
- ⑥ コメント：自発的なコメントができる

PECS（絵カード交換式コミュニケーションシステム）

自発的なコミュニケーションを形成するための独自の手順。発語が難しい児童でも、「絵カードを相手に渡す」という行動を通して、自分の要求を伝える方法を学ぶ。

★ 実践のポイント

「強化子（欲しいもの）」から開始 お菓子やおもちゃなど、モチベーションが高いものを使う。
2人体制での指導（初期） 「話し手（子供）」の後ろから「プロンプター」が手助けする。



その他の視覚支援との併用

視覚的構造化（TEACCH）が「理解」を助けるのに対し、PECSは「表出」を助ける。両輪で支援することが効果的。例：スケジュール、選択ボード、視覚タイマー、手順書

PECSの活用方法



フェイズ I

【コミュニケーションの仕方】
対象者は本当に欲しいものや活動を獲得するために一枚の絵カードを交換するように学ぶ。

フェイズ IV

【文構成】

対象者は簡単な文の構成を文カードと呼ばれる、取り外し可能なボードの上に並べることを学ぶ。



フェイズ II

【距離と持続性】

対象者はフェイズIで学んだスキルを違った場所、様々な人と、いろんな所へ移動しながら使うことで般化させることを学ぶ。



フェイズ III

【絵カードの弁別】

自分の欲しいものを要求するために2枚以上の絵カードの中から正しい絵カードを選ぶことを学習する。



フェイズ VI

【コメント】

対象者は“何が見える？”“何が聞こえる？”，や“これは何？”などの質問に答えることでコメントすることを学ぶ。



フェイズ V

【応答による要求】

対象者は“何が欲しいの？”のような質問にPECSを使って答えることを学ぶ。

その他：さまざまな療育理論



発達理論

行動・学習
理論

感覚統合理
論

認知・実行
機能支援

(ASD) ア
プローチ

発達障害児
教育

その他の支
援理論

■ ピアジェの認知発達理論

■ ヴィゴツキーの社会文化的発達理論 (ZPD・足場かけなど)

■ エリクソンの心理社会的発達理論

■ ボウルビィの愛着理論

■ ブロンfenブレンナーの生態学的システム理論

発達理論

行動・学習
理論

感覚統合理
論

認知・実行
機能支援

(ASD) ア
プローチ

発達障害児
教育

その他の支
援理論

■ 応用行動分析 (ABA)

■ 強化学習・オペラント条件づけ (スキナー)

■ 古典的条件づけ (パブロフ)

発達理論

行動・学習
理論

感覚統合理
論

認知・実行
機能支援

(ASD) ア
プローチ

発達障害児
教育

その他の支
援理論

■ 感覚統合療法（ジャン・エアーズ）

発達理論

行動・学習
理論

感覚統合理
論

認知・実行
機能支援

(ASD) ア
プローチ

発達障害児
教育

その他の支
援理論

- 認知行動療法 (CBT)
- ソーシャルスキルトレーニング (SST)
- メタ認知的アプローチ
- TEACCHプログラム
- 構造化教育
- ペアレント・トレーニング (PT)

- DIR／Floortimeモデル
- PECS（絵カード交換式コミュニケーション）
- DENVERモデル（ESDM）
- SCERTSモデル
- RDI（発達的個別関係ベース介入）
- 自閉症支援のための構造化された日課の活用

発達理論

行動・学習
理論

感覚統合理
論

認知・実行
機能支援

(ASD) ア
プローチ

発達障害児
教育

その他の支
援理論

- モンテッソーリ教育
- シュタイナー教育（ヴァルドルフ教育）
- レッジョ・エミリア・アプローチ

- ポジティブ行動支援 (PBS)
- アンガーマネジメント理論
- トラウマインフォームドケア
- ナラティブアプローチ
- エンパワメント理論
- レジリエンス支援理論
- ユニバーサルデザイン教育 (UDL)
- アフォーダンス理論 (環境と行動の関係)
- ラポール形成 (信頼関係の構築) に関する心理学的理解

療育理論の活用



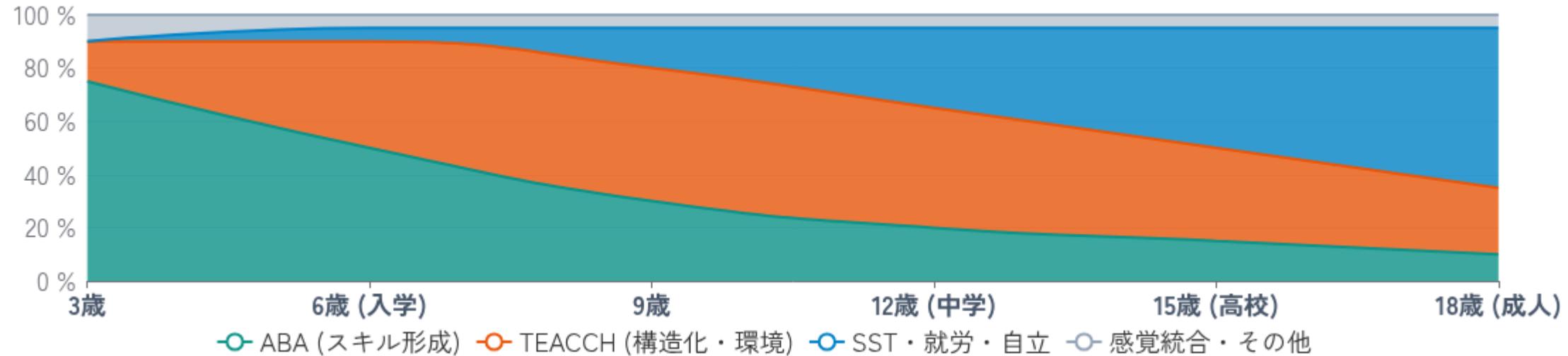
手法別 年齢別 など

手法別・適用早見表

手法	主な目的・役割	強み・メリット	注意点・リスク
 ABA (応用行動分析)	行動の形成と変容望 ましい行動を増やし 、不適切な行動を減 らす	エビデンススモール ステップで確実な学 習が可能	誤学習不適切な対応（誤 った強化）が悪化させる リスク
 TEACCH (構造化支援)	環境設定と自立「見 てわかる」環境を作 り、安心感と自立を 促す	自立促進指示待ちに ならず一人で行動で きる	過構造化固めすぎると、 変化への適応力が育ちに くい
 感覚統合 (SI療法)	感覚処理と適応感覚 の偏りを調整し、情 動を安定させる	情動安定不器用さや 感覚過敏の根本改善	専門性OT等の評価がな いと、不快な刺激にな る恐れ

年齢別の支援アプローチ

子どものライフステージの変化に合わせて、支援手法の比重（ポートフォリオ）を最適化していくことが重要。早期はスキル獲得、成長とともに自立と社会参加へシフトする



幼児期 (~6歳)

早期集中介入

ABA（応用行動分析）を中心とした個別スキル形成が効果的。ペアトレによる家庭連携も重要。

学齢期 (6~15歳)

集団適応と構造化

学校生活ではTEACCH（構造化）による環境設定が主軸。学習支援や感覚統合も適宜実施。

思春期・成人期 (15歳~)

自立と社会参加

SSTや就労に向けた実践的訓練が増加。自己理解（告知）やアドボカシー支援も重要。

療育理論の活用ポイント

- 子どもの課題や特性をしつかり把握する（アセスメント）
- 支援の狙い（行動改善／社会性／感覚調整など）に応じて理論を選ぶ
- 理論を「単独」でなく「組み合わせて」活用
- 療育理論をそのまま使うのではなく、考え方を活用する
- 系統的な活用のイメージをつくる
- 保護者・学校と連携して統一感のある支援方針を構築
- 専門的な用語を知っておき、解説をした上で使えること
- さまざまな療育理論を理解していることは、子どもの支援において「なぜ、そうするのか？」の説明に役立つ